

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第30集

鎌田遺跡・西新屋遺跡・西新屋古墓群

-野依バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書-

1996年6月

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第30集

かまた にしあら や にしあら や
鎌田遺跡・西新屋遺跡・西新屋古墓群

－野依バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－

1996年6月

豊橋市教育委員会

カラー図版 1



1

1. 古瀬戸・瓶子



2

2. 古瀬戸・瓶子



3

3. 古瀬戸・瓶子



4

4. 古瀬戸・瓶子

カラー図版2



5

1. 古瀬戸・瓶子



6

2. 古瀬戸・瓶子



11

3. 古瀬戸・水注



12

4. 渥美・小壺

例　　言

1. 本書は、豊橋市野依町字上地・西新屋において県道野依バイパス建設に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査の報告書である。調査期間は、鎌田遺跡（205m²）・西新屋遺跡（40m²）が1987年8月4日～8月25日、西新屋古墓群（9m²）が1988年10月12日である。
2. 発掘調査は豊橋市教育委員会が行い、鎌田遺跡・西新屋遺跡は小林久彦（当時豊橋市美術博物館学芸員）が、西新屋古墓群は岩瀬彰利（当時同館学芸員）が、それぞれ調査を担当した。
3. 報告書作成にあたり、遺物・遺構等の実測・拓本・トレース等については、多田美香、伊藤雅子、山本鞠子、氏原久枝、井上佳子各氏の援助を受けた。また、写真撮影は小林・岩瀬が行った。
4. 本書の執筆に際して、遺物に関しては野末浩之氏（元愛知県陶磁資料館）、野依地域史については和田実氏（豊橋市二川宿本陣資料館）の御教示を頂いた。発掘調査に際しては、請負業者である三河土建株式会社から援助を受けた。発掘作業、整理作業については、地元の方々の御協力を得ることができた。記して感謝の意を表す次第である。
5. 本書の執筆は次の通りである。

第1章1、第3章、第4章、第6章1・2	………	小林久彦（豊橋市教育委員会文化振興課）
第1章2、第2章、第5章、第6章3	………	岩瀬彰利（豊橋市教育委員会文化振興課）
6. 本書の編集は小林・岩瀬が行った。
7. 本書に使用した方位は磁北である。遺物・遺構のスケールはそれぞれに明示した。なお、写真的縮尺は任意である。
8. 本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管している。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地	1
2. 歴史的環境	3

第2章 調査の経過 6

第3章 鎌田遺跡

1. 遺構	8
2. 遺物	12

第4章 西新屋遺跡

1. 遺構	15
2. 遺物	19

第5章 西新屋古墓群

1. 遺構	23
2. 遺物	24

第6章 まとめ

1. 鎌田遺跡について	30
2. 西新屋遺跡について	30
3. 西新屋古墓群について	31

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/50,000)	1
第2図 遺跡周辺地形図 (1/10,000)	2
第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	5
第4図 調査区位置図 (1/2,500)	7
第5図 鎌田遺跡調査区配置図 (1/500)	8
第6図 鎌田遺跡A区平面図・断面図 (1/80)	9
第7図 鎌田遺跡B区平面図・断面図 (1/80)	10
第8図 鎌田遺跡C区平面図・断面図 (1/80)	11
第9図 鎌田遺跡出土遺物実測図 (1/3)	13
第10図 西新屋遺跡トレンチ位置図 (1/150)	16
第11図 西新屋遺跡トレンチ平面図・断面図 (1/80)	17
第12図 西新屋遺跡出土遺物実測図-1 (1/3)	20
第13図 西新屋遺跡出土遺物実測図-2 (1/3)	21
第14図 西新屋古墓群発掘調査区位置図 (1/500)	23
第15図 西新屋古墓群出土遺物実測図-1 (1/3)	25
第16図 西新屋古墓群出土遺物実測図-2 (1/3)	27
第17図 西新屋古墓群出土遺物実測図-3 (1/3)	28

表 目 次

第1表 周辺遺跡地名表	4
第2表 鎌田遺跡出土遺物観察表	14
第3表 西新屋遺跡出土遺物観察表	22
第4表 西新屋古墓群出土遺物観察表	29

写 真 図 版 目 次

- 図版 1 - 1 鎌田遺跡遠景（南東から）
2 鎌田遺跡近景（南から）
3 鎌田遺跡A区全景（南から）
2 - 1 鎌田遺跡B区・C区全景（北から）
2 鎌田遺跡B区全景（北から）
3 - 1 鎌田遺跡B区近景（南から）
2 鎌田遺跡B区SK-03（南から）
3 鎌田遺跡C区全景（北から）
4 鎌田遺跡出土遺物
5 - 1 西新屋遺跡遠景（北東から）
2 西新屋遺跡近景（北から）
3 西新屋遺跡作業風景（南から）
6 - 1 西新屋遺跡1トレンチ（南東から）
2 西新屋遺跡2トレンチ（南東から）
3 西新屋遺跡3トレンチ（南東から）
4 西新屋遺跡4トレンチ（南東から）
7 西新屋遺跡出土遺物
8 - 1 西新屋古墓群近景（北から）
2 藏骨器出土地完掘後全景（西から）
9 - 1 移された五輪塔（南から）
2 五輪塔近接写真（南から）
10 西新屋古墓群出土遺物

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

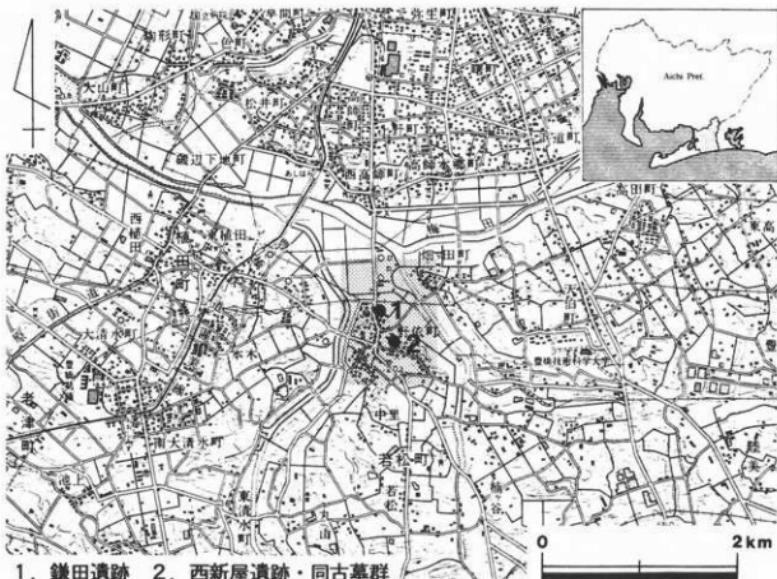
1. 遺跡の立地 (第1・2図)

鎌田遺跡（1）や西新屋遺跡・同古墓群（2）が所在する野依地区は、豊橋市の市街地から南に6～7kmのところにある。これらの遺跡は地形分類上、天伯原面と呼ばれる高位段丘面上に立地している。

周辺の地形

三河湾に流れる梅田川を境に、南側の段丘は天伯原面、北側の段丘は高師原面と呼ばれる。このうち天伯原面は、渥美曲隆運動の影響を大きく受けて地形が北に向かって緩やかに傾斜し、また形成時期が古いため開析がかなり進んでいる。

鎌田遺跡等が所在する野依地区は、こうした段丘の最も北側に位置していることもあり、沖積面との高低差は4～10m程とかなり低くなっている。また、梅田川の支流である浜田川と西の川とによって両側から開析されているため、段丘は舌状に延びている。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

舌状に延びた段丘は、西側では緩やかに傾斜し、東側では急に段丘崖となっている。鎌田遺跡等は、いずれも急な段丘崖に接した部分にあり、すぐ下には谷底平野が広がっている。

遺跡と城館の立地

鎌田遺跡は、上述のように段丘縁辺部にあり、沖積面との高低差は4m程を測り、水害等に対しては安全な立地である。また、西新屋遺跡や西新屋古墓群についても同様なことが言える。ただし、これらの遺跡が比較的平坦な面の部分ではなく、段丘崖に接した部分に立地している意味については不明と言わざるを得ない。

参考までに、第2図には周辺に所在する城館址を同時に示した。

これらはいずれも畠田氏の居城と

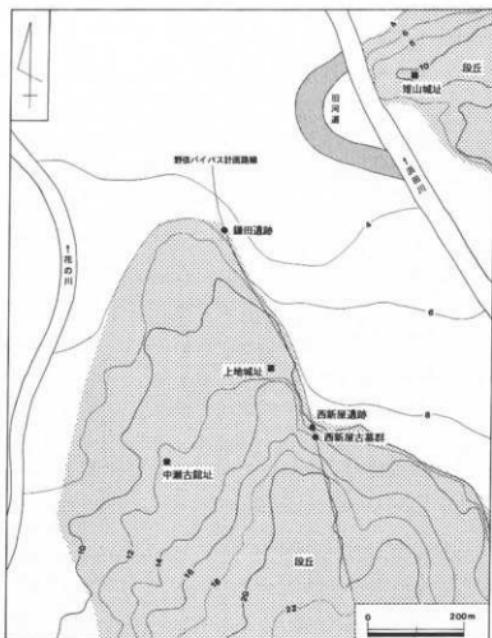
考えられているものであるが、詳細ははっきりしない。

上地城は、比較的段丘の縁辺に寄った選地であり、また雉子山城も段丘の先端部で同様の選地と考えられる。こうした選地からすれば、これら二つの城は防御的な配慮が十分に伺える。これに対して中瀬古館は、比較的平坦な場所にあり防御的な意図が伺えない。城の詳細が不明であるため細かなことについては触れられないが、城館の性格の違いが立地に表れるのであろう。

参考文献

- 水野季彦 「遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 水神古窯』 豊橋市教育委員会 1987

同 「梅田川谷底平野の自然環境」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第10集』 豊橋市教育委員会 1989



第2図 遺跡周辺地形図 (1/10,000)

2. 歴史的環境（第3図、第1表）

鎌田遺跡・西新屋遺跡の所在する野依地区は、梅田川の中流域の天伯原台地の北端に位置している。台地の北側には梅田川が流れ、川を境に北側は高師原台地になっている。梅田川中流域は縄文～弥生時代の遺跡の多い地域と言える。（註1）

縄文時代の遺跡は多数所在しているが、なかでも東原遺跡（14）、大穴池西遺跡（16）、桜遺跡（13）等が知られている。東原遺跡は愛知大学考古学研究会によって1987年から8次に渡る調査（註2）が行われている。調査では市内でも最古級の草創期の土器片と早期の神宮寺式併行の押型文土器や撚糸文土器、前期の清水の上I・II式土器や条痕文土器が出土している。大穴池西遺跡は早期の土器の他に抉状耳飾や多数の石器が出土している。また、1986年に芳賀陽氏によって発掘（註3）が行われ、縄文土器片や石鏃等が出土している。桜遺跡は昭和60年に試掘調査（註4）が行われ、縄文時代前期～晚期の土器や石器等が出土している。このうち、縄文土器は各型式がほぼ継続して出土しており、長期的に統いた集落であった可能性が考えられる。

弥生時代の遺跡も多く見つかっており、西ノ上遺跡（7）、西山遺跡（31）、西川遺跡（25）、落合遺跡（18）等の遺跡が知られている。このうち、西山遺跡は1983年～1985年にかけて土地造成に伴う大規模な発掘調査が行われている（註5）。調査では瓜郷式期～欠山式期の竪穴住居址が44軒検出され、そのうち1軒からは剣身形青銅器が出土している。西ノ上遺跡は1981年擁護壁造成に伴う事前調査が行われ、弥生土器が数十点出土している。この他にも遺物が採集されている遺跡は多数あるが、本格的に調査されたものは少ないといえよう。

古墳時代になると遺跡はあまり発見されておらず、雉子山遺跡（20）等が僅かに知られているに過ぎない。また古墳も梅田川の上流域と下流域では確認されているが、中流域では見つかっていない。

古代になると、集落址は知られておらず、桜遺跡から遺物が採集されているにすぎない。古代の遺跡では灰釉陶器の古窯址が豊橋市南部に分布しており、一大生産地を形成している。この地域では小谷古窯址（9）、津森古窯址（11）等が確認されている。このうち、小谷古窯址は1976年に宅地造成工事に伴い発掘調査が行われている。調査の結果、窯体は燃焼室、焚口以外は県道によって破壊されていたが灰原から多量の遺物が出土している。遺物は灰釉陶器の碗・中皿・小皿・鉢・長頸壺、陶丸、窯道具等が出土している（註1）。

中世になると、天伯原台地南部を中心に中世陶器の生産が行われている。古窯址では西山古窯址（32）、寸沢古窯址（37）、穴沢古窯址（22）、北柄沢古窯址（23）、八重屋敷古窯址（35）、上鶴田古窯址（39）等多数見つかっているが、未発見の窯址も多く存在しているものと思われる。西山古窯址は1983年に宅地造成に伴い発掘され、報告書（註5）も刊行されている。それによると、窯体は1基存在しており、分焰柱の両側に間仕切り障壁をもち、焼成室が比較的良好に残存していた。遺物には中世陶器・碗・小皿・壺・広口壺等が出土している。寸沢古窯址は1992年に範囲確認の調査を行っているが、遺構・遺物は確認できず、既に消滅している可能性がある。

集落址は、この地区はまだ調査が進んでいないため不明であり、鎌田遺跡、桜遺跡等で遺物が採集

されているに過ぎない。しかし、鎌田遺跡などでは中世の貝層等が検出（註6）されている。

城址には畔田氏の居城である上地城址（27）、雉子山城址（19）等が知られている。

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	城山遺跡	弥生	24	釜穴古窯址	中世
2	草間城址	中世	25	西川遺跡	弥生
3	向郷遺跡	中世・近世	26	鎌田遺跡	中世
4	若松石剣出土地	弥生	27	上地城址	中世
5	高地遺跡	縄文	28	西新屋遺跡・古墓	中世
6	芦原遺跡	中世・近世	29	中瀬古館址	中世
7	西ノ上遺跡	弥生	30	森下遺跡	弥生
8	上原遺跡	縄文	31	西山遺跡	弥生
9	小谷古窯址	古代	32	西山古窯址	中世
10	小谷遺跡	縄文～弥生	33	三反田遺跡	中世
11	津森古窯址	古代	34	上藤ヶ谷古窯址	中世
12	津森遺跡	弥生	35	八重屋敷古窯址	中世
13	桜遺跡	縄文～中世	36	南丸山古窯址	中世
14	東原遺跡	縄文	37	寸沢遺跡	近世
15	烟ヶ田遺跡	弥生	38	上鶯田遺跡	中世
16	大穴池西遺跡	縄文	39	上鶯田古窯址	中世
17	西天伯遺跡	弥生	40	若松（寸沢）遺跡	古墳
18	落合遺跡	弥生～古墳	41	諏訪遺跡	中世・近世
19	雉子山城址	中世	42	井原遺跡	近世
20	雉子山遺跡	縄文・古墳	43	山ノ神遺跡	近世
21	仏餉遺跡	弥生	44	東欠遺跡	中世
22	穴沢古窯址	中世	45	寸沢古窯址	中世
23	北柄沢古窯址	中世	46	藤ヶ谷A古窯址	中世

註1 伊藤恵・芳賀陽『高師風土記』 1976

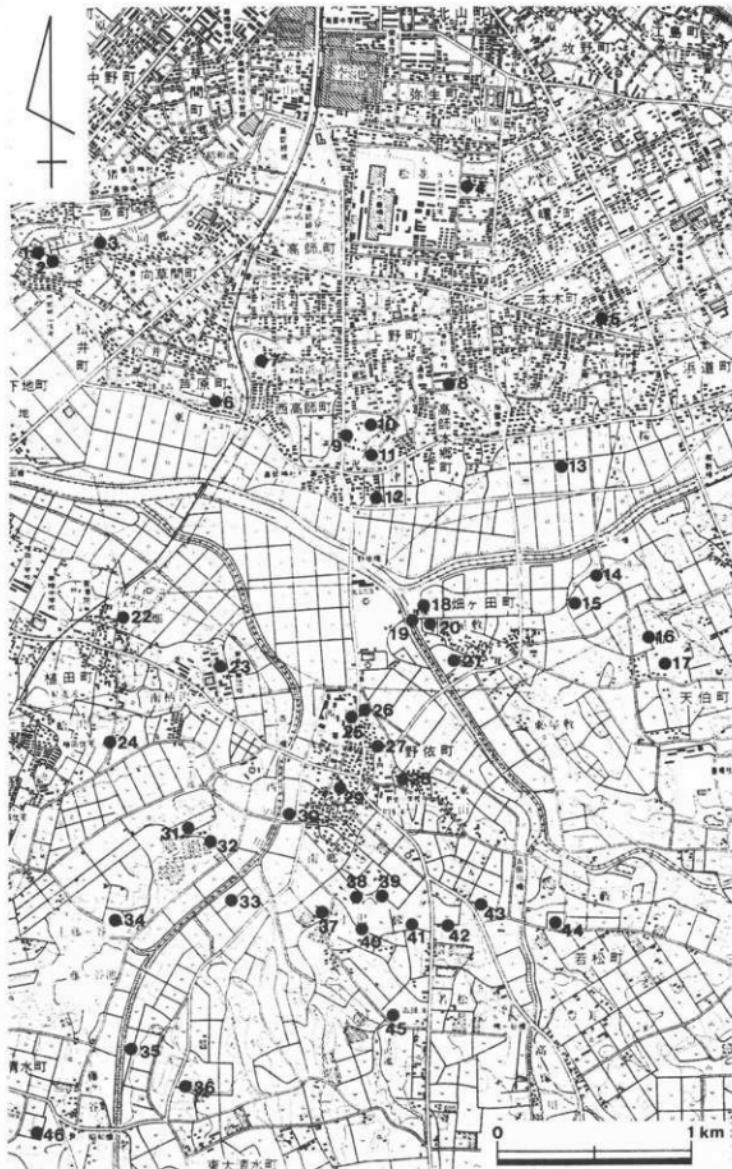
註2 愛知大学考古学研究会『東原遺跡発掘調査概要』第1次～8次 1979～1986

註3 愛知県教育委員会『愛知県埋蔵文化財情報』3 1988

註4 豊橋市教育委員会『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第10集 桜遺跡試掘調査報告書』1989

註5 豊橋市遺跡調査会『西山』 1988

註6 森田勝三「豊橋市野依町・鎌田遺跡の破壊について」『足跡』第3号 1978



第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第2章 調査の経過

愛知県豊橋土木事務所では、県道伊古部南栄線のうち野依町の街中を通過する区間について、渋滞緩和等を目的として、野依バイパスを建設することになった。豊橋市教育委員会では、バイパス予定地に鎌田遺跡が存在することから、鎌田遺跡については記録保存のための発掘調査を行い、西新屋地区については埋蔵文化財有無の確認のための試掘調査を実施することにした（第4図）。

鎌田遺跡及び西新屋遺跡の調査は、1987年8月4日から8月25日にかけて行った。鎌田遺跡は、段丘の縁辺部に立地しているが、大きく土採りが行われるなど所々で擾乱を受けていた。このため調査区は、バイパス建設予定地内の旧地形が遺存する3ヶ所に設定し、北側からA区・B区・C区と呼んだ。A区より順に表土層を重機で除去し、道路センター杭を基準に調査区を設定した。統いて、各地区ごとに人力によって断ち割りや精査を行い遺構検出に努めた。結果は、A区で溝状の落込みが、B区では土壙が1箇所検出された。遺物は灰釉系陶器が比較的多く出土したが、これまでに紹介されているような貝層等は確認されなかった（註1）。

西新屋遺跡の試掘調査は、鎌田遺跡の調査にある程度めどがついた8月18日より行った。当初付近には、西新屋古墓の存在が予想されたが、近くに住む人の話によると過去に出土した藏骨器の場所は、道路予定地より外れているとのことであった（註2）。また、調査可能な範囲が段丘の斜面に限られていたため、ここに4本のトレンチを設定して、遺構有無の確認を行った。調査では、周辺地形の測量を行い、1～4トレンチを順次掘り下げていった。各トレンチでは遺構は検出されず、僅かな遺物が出土したのみである。

翌年の1988年10月上旬に野依バイパス工事を請け負っている三河土建株式会社より、工事中に藏骨器が出土したとの連絡が豊橋市美術博物館にあった。市教育委員会では出土遺物を持参してもらい遺物をみると、古瀬戸の瓶子で残存状況が極めて良好であった。このため、工事を中止するように要請し、併せて愛知県教育委員会に連絡し、現地視察を要請した。

後日、県教育委員会より担当者が来訪し、市教育委員会の担当者と現地に赴いた。現地では工事責任者より出土した時の状況を聞き、更に周辺住民に聞き取り調査を行った。その結果、以前この地に五輪塔が建っていたが、他の場所に五輪塔のみ移され奉られているということを聞き、移されていた五輪塔も確認することができた。五輪塔は1箇所の小堂に集められて全部で11基を数え、そのうち2基が一石五輪塔であった。これらの状況より、現地にまだ遺構が残っていることが考えられたため、藏骨器出土地点を中心に緊急調査を行うように県教育委員会より指導を受けた。

市教育委員会では、これを受けて10月12日に藏骨器出土地を中心緊急調査を実施した。調査では古墓に関連したと思われる河原石が多数出土したが、その河原石の下にはコンクリート塊や雑草があり、遺構は既に工事によって破壊されていた。このため、土層中の遺物採集に努め調査を終了した。

註1 森田勝三 「豊橋市野依町・鎌田遺跡の破壊について」 『足跡』第3号 1978

これによると、アサリを主体とする小貝塚、V字溝、ピット等が確認されている。

註2 実際には、翌年10月の経緯のように、調査区を少し離れたところから藏骨器が出土した。



第4図 調査区位置図 (1/2,500)

第3章 鎌田遺跡

1. 遺構 (第5~8図)

鎌田遺跡は、段丘の縁辺部に位置しているが、土採り等によって部分的に破壊されていた。このため調査区は、A区、B区、C区の三ヶ所に大きく分けた。また細かな地区名は、道路予定の中心杭を基準にして5mごとに南から北へ1~16、同じく西から東へA~Dとして、それぞれが交差する名称をもって表した（第5図）。

調査の方法については、遺構の検出が困難であることや時間的な制約があることから、グリッドに合わせて幅30cm程度の断ち割りを行い遺構の検出に努めた。なお遺構名については、土壤=SKとして表記した。

A区（第6図）

基本層序は、表土（灰色砂質土）のすぐ下が地山（淡黄褐色砂礫土）であるが、部分的には造成土と考えられる灰褐色砂質土（2層）が見られる。

調査区のはば北東半分では表土直下が地山となり、遺構は全く検出されていない。これに対して南西半分では、SK-O1とSK-O2が検出されている。

SK-O1

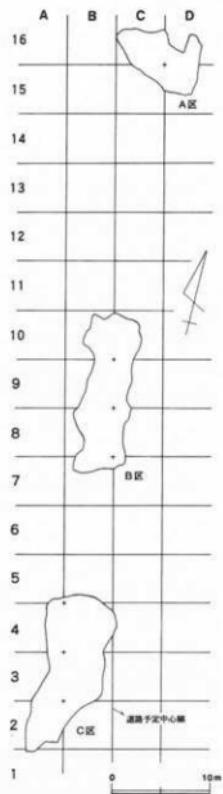
SK-O1は、調査区の北西端C-16区で検出されたため、その大半は調査区外となり、規模や平面形ははっきりしない。ただし、検出した上場の長さが2.5m以上に及ぶもので、かなり大きなものになる可能性がある。深さは約1.5m（以下計測値は遺存値である）を測る。

埋土は、暗灰色砂質土（3）・暗灰褐色砂質土（4）であり、灰釉系陶器や土師器の破片が出土している。遺構の時期ははっきりしないが、12世紀後半以降のものであろう。

SK-O2

SK-O2は、調査区南端C-D-15区で検出された。規模については、その多くが調査区外となることもありはっきりしないが、平面形は橢円形となる可能性が高い。深さは70cm程で、底部は比較的平坦である。

埋土は、暗灰褐色砂質土（4）であり、灰釉系陶器が出土している。遺構の時期ははっきりしないが、12世紀後半以降のものであろう。



第5図 鎌田遺跡調査区配置図 (1/500)

B区（第7図）

基本層序は、表土（淡灰褐色砂質土）の下が地山（淡黄褐色砂礫土）であるが、地形が西から東へ傾斜していることもあり、東側に向かって黒灰色砂質土（5）や暗茶褐色砂質土（6）等が厚く堆積している。

遺構は、SK-03とSK-04が検出されている。

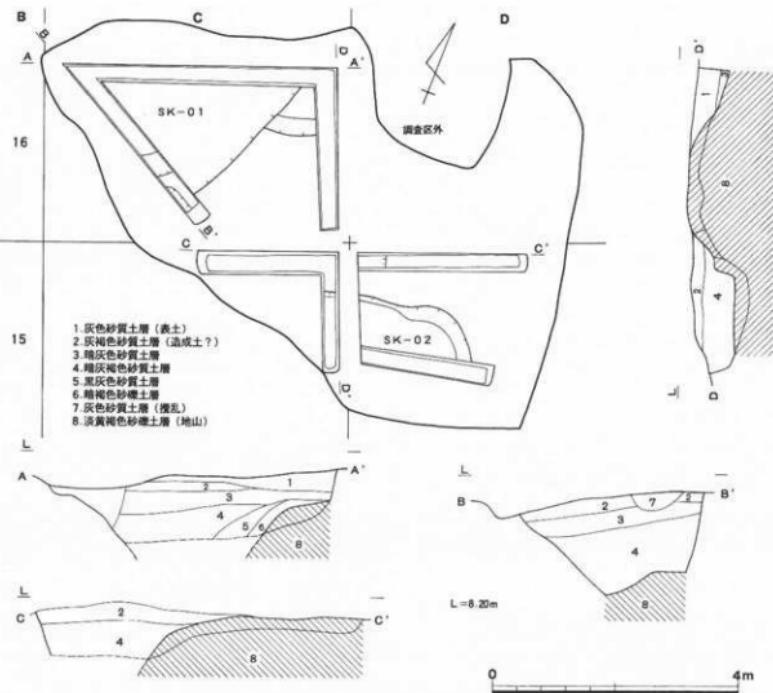
SK-03

SK-03は、B・C-9区で検出されたものであるが、完掘していないため規模・平面形は不詳である。検出した部分では、2m程の規模となり、かなり大きなものになる可能性がある。深さは約34cm程を測る。

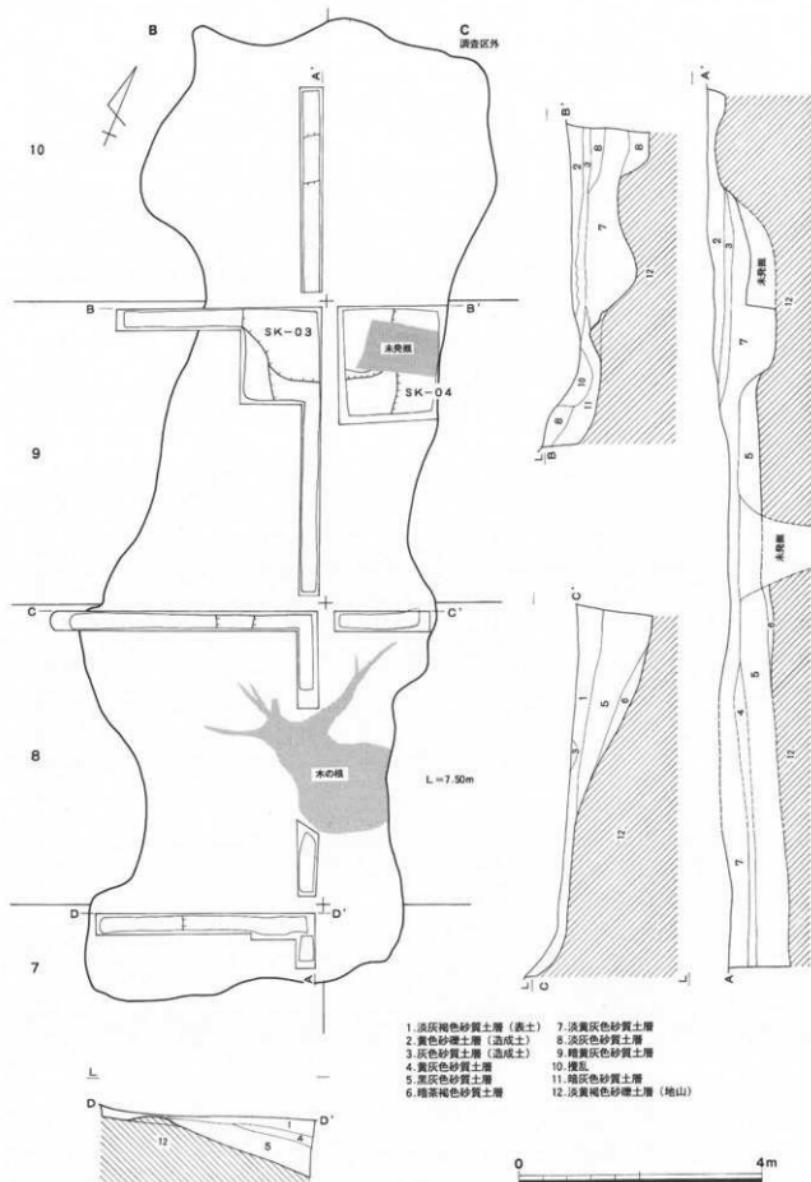
埋土は、比較的しまりのある淡黄灰色砂質土（7）であるが、他にも広がっているもので土壤としての区別がはっきりしない。土壤内には、拳大の石が浮いた状態ではあるが比較的まとまって出土し、また灰釉系陶器や土師器の破片も出土している。遺構の時期は、12~13世紀のものと考えられる。

SK-04

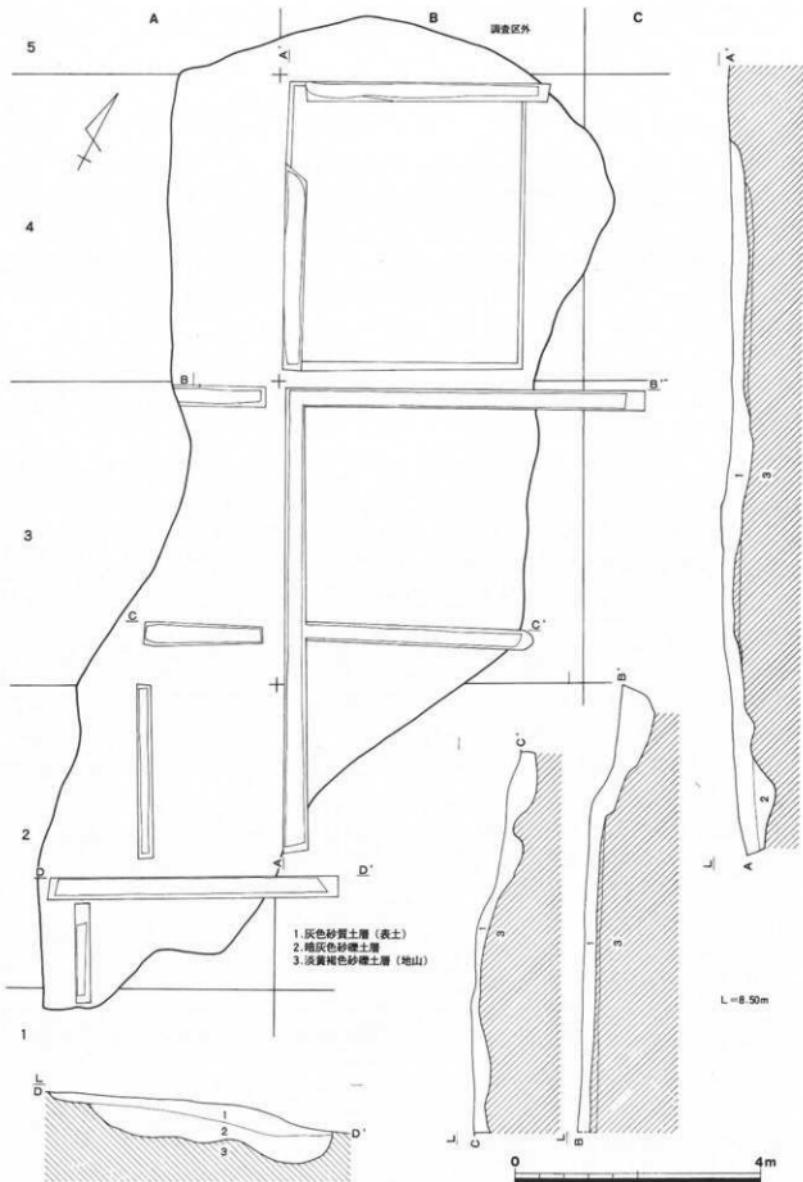
SK-04は、SK-03に接したC-9区で検出された。規模については、その多くが調査区外



第6図 錦田遺跡A区平面図・断面図 (1/80)



第7図 鎌田遺跡B区平面図・断面図 (1/80)



第8図 鎌田遺跡C区平面図・断面図 (1/80)

となり不明である。深さは20cm程で、埋土は淡灰褐色砂質土（8）である。遺物は出土していないため、遺構の時期ははっきりしない。

C区（第8図）

基本層序は、表土（灰色砂質土）の下が地山（淡黄褐色砂礫土）である。本調査区では、遺構は全く検出されず、地山検出面は比較的平坦である。遺跡がこの付近まで及んでいないと考えることもできるが、土採り等の擾乱によって既に削平された可能性もある。ただ、遺物は出土していないがA・B-2区付近では暗灰色砂礫土（2）が堆積しており、この窪地状のものが遺構となる可能性もある。

2. 遺物（第9図、第2表）

出土遺物については、各地区ごとに述べていく。なお、遺物の量はコンテナ箱（34×54×20cm）に1箱程でけで多いものではない。

A区（1～13）

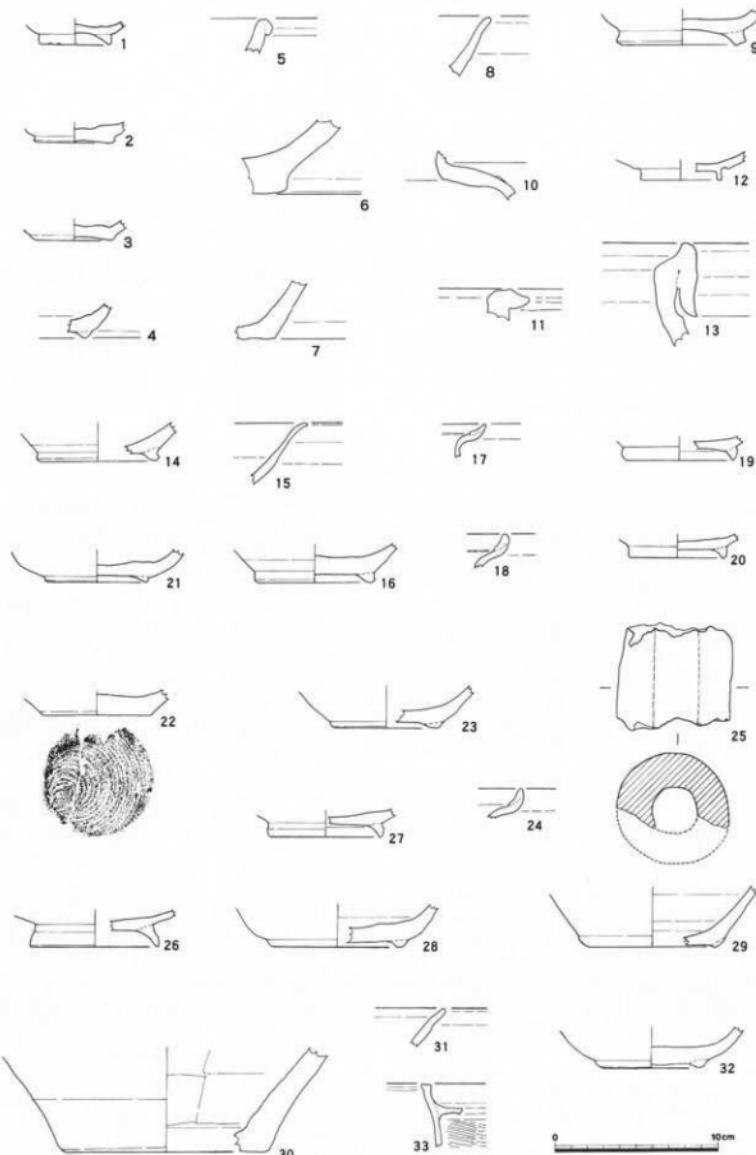
遺構から出土した遺物は少なく、1がSK-01、8・9がSK-02から出土している程度である。これ以外は表土中や擾乱から出土している。

1はSK-01出土の灰釉系陶器小皿で、高台の接地面にはモミ痕が見られる。なお、SK-01ではこれ以外に陶器片も出土している。2は土師器碗の底部破片で、ロクロ整形によるものである。3～6は灰釉系陶器で、3は無高台の碗、4はかなり低い高台を持つ碗であり、底部外面には糸切り痕が見られる。5は鉢と考えられ、口縁端部が折り返されている。6は壺の底部破片で、底部外面は未調整である。7は常滑窯産の甕と考えられる底部破片で、外面にはヘラケズギが見られる。8・9はSK-02出土の灰釉系陶器碗で、8は緩やかに外反する口縁部破片、9は断面台形の高台部破片である。なお、SK-02ではこれ以外に土師器の破片も僅かに出土している。10は古瀬戸四耳壺と考えられる肩部の破片で、外面には灰釉が施され、内面はナデによる調整である。11は土師器甕で、口縁部を外方に折り返し、内外面はナデによる調整である。12は陶器碗で、内外面には鉄釉が施される。高台部は削り出しによるものである。13は常滑窯産の甕で、口縁部は大きく折り返されている。内外面の調整は、ロクロナデである。

B区（14～29）

遺物は、いずれも表土中から出土している。なお、ここに示した以外には灰釉系陶器小皿の破片等も出土している。

14～16は灰釉系陶器碗で、15は器壁が薄くいわゆる「北部系山茶碗」である。高台はいずれも断面が低い台形をしている。17・18・24は土師器土鍋で、口縁部を内側に折り返すいわゆる「伊勢型鍋」である。調整はナデである。19～21・23は灰釉系陶器碗で、高台は全体的に低く小さくつくられている。調整は内外面ロクロナデで、底部外面には糸切り痕が残る。22はロクロ整形による土師器碗で、



第9図 鎌田遺跡出土遺物実測図 (1/3)

底部外面には糸切り痕が明瞭に残る。25はフイゴの羽口で、外径6.8cm、内径2.5cm程を測る。26・27は灰釉陶器碗で、26は東山72号窯式に、27は折戸53号窯式にそれぞれ併行しよう。28・29は灰釉系陶器碗で、28の高台接地面には砂痕が見られ、29の高台はかなり低くなる。調整は外面ロクロナデで、底部外面には糸切り痕が残る。

C区 (30~33)

遺物は、表土中あるいは攪乱から出土している。なお、ここに示した以外には陶器碗片や鉄片等がある。

30は灰釉系陶器の甕と考えられる底部破片で、底部外面には砂痕が見られる。渥美窯の製品であろう。31・32は灰釉系陶器碗で、32の高台はかなり低いものである。33は土師器羽釜であり、外面にハケメが残る。

第2表 鎌田遺跡出土遺物観察表

遺物NO.	地区・層位	器種・分類	口径	高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
9-1	C-16 SK-01 K	小皿	(1.1)	4.4			密	良好	灰白色	高台部にモミ痕	
2	D-16 搾乱	H 瓢	(1.3)	4.8			密	良好	淡赤褐色	ロクロ整形、底部外面糸切り	
3	C-16 表土	K 瓢	(1.3)	4.8			密	良好	淡白色	底部外面糸切り後ナデ	
4	C-16 表土	K 瓢	(1.8)				密	良好	淡灰色		
5	C-16 表土	K 鉢(?)	(2.0)				密	良好	灰白色	内外面ロクロナデ	
6	C-16 表土	K 蓋	(4.6)				密	良好	暗灰色		
7	C-16 表土	T 甕(?)	(3.6)				密	良好	茶褐色	外面一部ヘラケズリ	常滑窯
8	D-15 SK-02 K	碗	(3.7)				密	良好	灰白色	内外面ロクロナデ	
9	C-15 SK-02 K	碗	(2.1)	7.0			密	良好	灰褐色		
10	C-15 表土	T 甕	(3.1)				緻密	良好	淡灰褐色	古瀬戸四耳甕か?	
11	C-15 表土	H 甕	(2.0)				やや粗	やや不良	淡茶褐色		
12	C-15 表土	T 瓢	(1.7)	5.0			密	良好	淡灰白色	底部外面回転ヘラケズリ	鐵輪
13	A区 表土	T 甕	(6.2)				やや粗	良好	淡赤褐色		常滑窯
14	B-10 表土	K 瓢	(2.3)	7.0			密	良好	灰白色		
15	C-9 表土	K 瓢	(4.8)				密	良好	灰白色		北部系
16	C-9 表土	K 瓢	(2.4)	7.8			密	良好	灰白色		
17	C-9 表土	H 土鍋	(2.1)				やや粗	良好	淡茶褐色	伊勢型鍋	
18	C-9 表土	H 土鍋	(2.2)				やや粗	良好	淡茶褐色	伊勢型鍋	
19	B-9 表土	K 瓢	(1.5)	6.4			密	良好	灰白色		
20	B-9 表土	K 瓢	(1.5)	5.8			密	良好	灰白色	高台部にモミ痕	
21	C-8 表土	K 瓢	(2.0)	6.4			やや粗	良好	灰白色	ロクロ整形、底部外面糸切り	
22	C-8 表土	H 瓢	(1.6)	6.6			密	良好	淡褐色		
23	B-8 表土	K 瓢	(2.6)	6.8			密	良好	灰白色		
24	B-8 表土	H 土鍋	(1.8)				やや粗	良好	淡茶褐色	伊勢型鍋	
25	B-7 表土	D 羽口	推定径6.8				やや粗	良好	淡褐色		
26	B区 表土	G 瓢	(2.3)	7.8			密	良好	灰白色		
27	B区 表土	G 瓢	(1.1)	6.9			密	良好	灰白色		
28	B区 表土	K 瓢	(2.9)	8.0			密	良好	灰白色	高台部に砂痕	内外に灰輪
29	B区 表土	K 瓢	(3.7)	7.8			密	良好	灰白色		
30	A-1 表土	K 甕	(6.4)	12.8			密	良好	灰白色	底部外面未調整	
31	B-3 表土	K 瓢	(2.5)				密	良好	暗灰色		
32	B-3 搾乱	K 瓢	(2.6)	6.0			密	良好	灰白色		
33	B-3 表土	H 羽釜	(3.9)				密	良好	淡茶褐色		

※法量の単位はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

Y-弥生土器 H-土師器 G-灰釉陶器 K-灰釉系陶器 T-陶器 Z-磁器 D-土製品

第4章 西新屋遺跡

1. 遺構 (第10・11図)

当地区では、周囲に古墓の存在が予想されていたため、調査可能な範囲において遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施した。

調査箇所は、高低差4m程の北東に傾斜した段丘斜面である。まず、測量不可能な部分を除いて25cmセンターで周辺の地形測量を行い、続いて地形に合わせて1~4トレンチを設定した。

基本層序は、表土が暗褐色砂質土あるいは灰褐色砂質土で、すぐ下が淡褐色砂礫土の地山となる。ただし、低い部分に設定した3・4トレンチでは竹林の盛土と考えられる土層が堆積している。調査では地山面まで一気に掘り下げたが、部分的にはさらに断ち割って確認を行った。

1 トレンチ (第11図)

1トレンチは、長さ7.8m、幅1.0mで、最も高い標高13.5m程のところに設定した。このトレンチでは、ほぼ中央に溝状遺構SD-O 1を検出した。

SD-O 1は、幅0.7m、長さ2.0m以上を測り、断面は浅い「U」の字状となる。深さは0.4m程で、埋土は黒褐色砂質土である。遺構の時期については、出土した土師器小皿や陶器碗、瓦等から近世のものであろう。

これ以外では遺構は検出されず、表土中から土師器・陶器・磁器等が出土する程度である。

2 トレンチ (第11図)

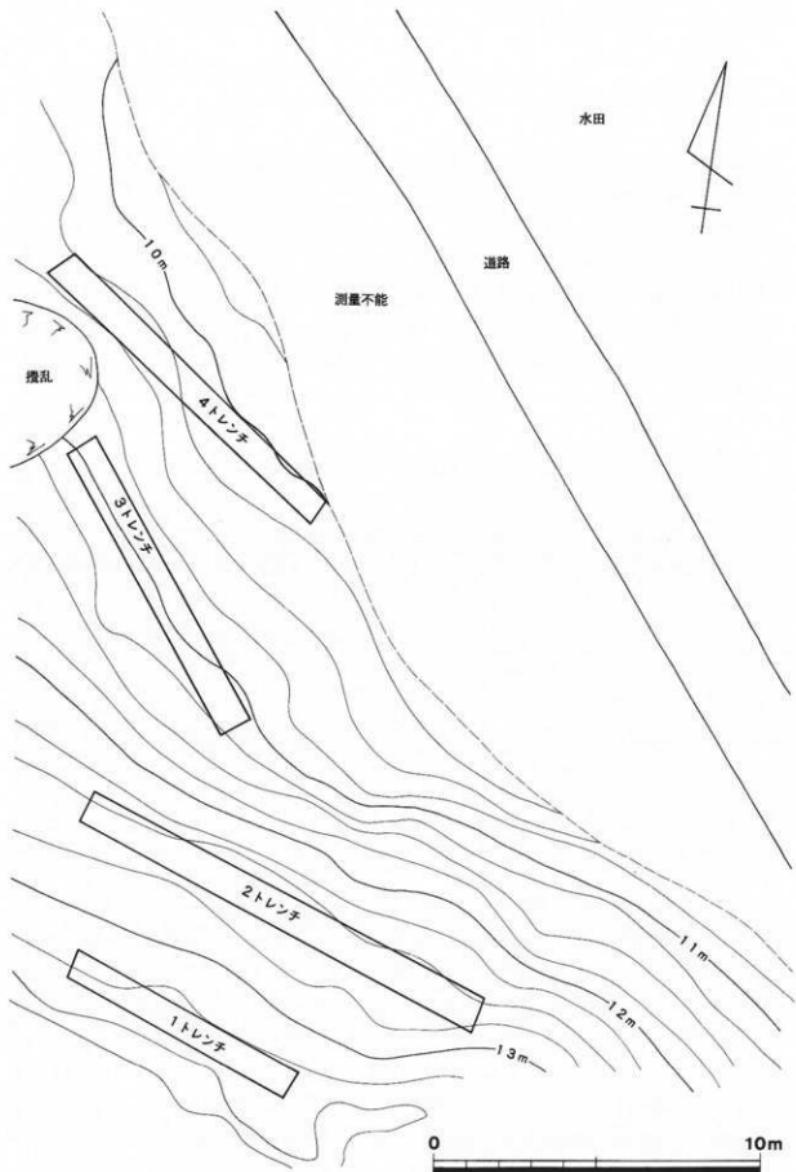
2トレンチは、長さ14.0m、幅1.0mで、1トレンチのすぐ下に設定した。表土の下はすぐに地山で、また地山面は比較的平坦である。遺構は全く検出されず、表土中から土師器・陶器・磁器等が出土する程度である。

3 トレンチ (第11図)

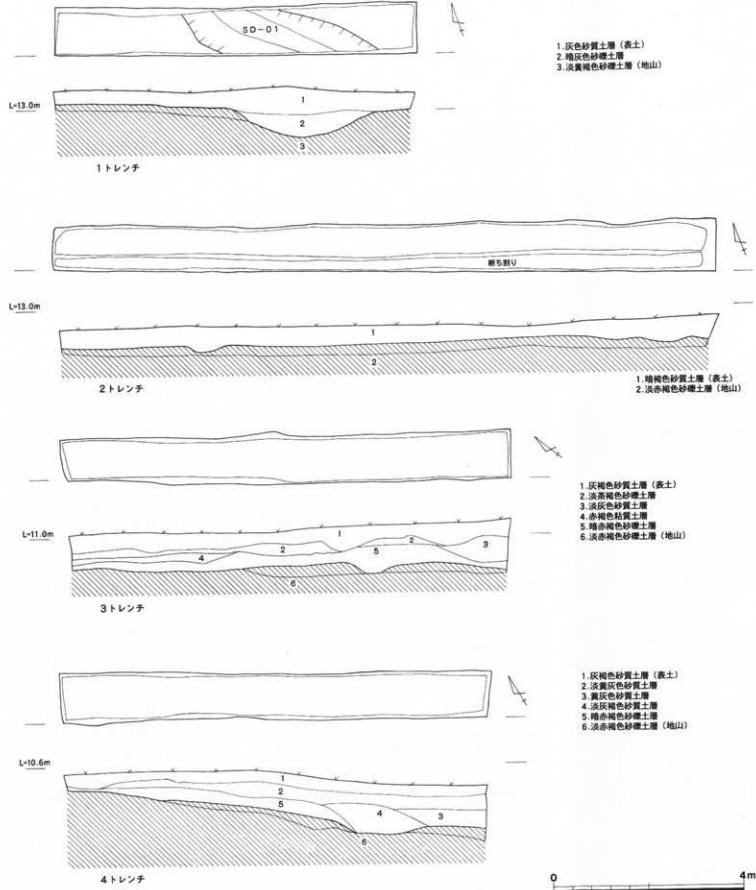
3トレンチは、長さ9.5m、幅1.0mで、2トレンチ北側の標高11.0m程のところに設定した。表土の下には、淡茶褐色砂礫土や暗赤褐色砂礫土等が堆積している。地山面は比較的平坦で、遺構は全く検出されない。遺物については、陶器・磁器・瓦等の破片が出土している程度である。

4 トレンチ (第11図)

4トレンチは、長さ9.0m、幅1.0mで、最も標高の低い比較的平坦な部分に設定した。表土の下には、淡黄灰色砂質土や暗赤褐色砂礫土等が堆積している。地山面は西から東に向かって緩やかに傾斜しているが、遺構は全く検出されない。遺物については、土師器や陶器の破片が出土している程度である。



第10図 西新屋遺跡トレンチ位置図 (1/150)



第11図 トレンチ平面図、断面図 (1/80)

2. 遺物 (第12・13図、第3表)

出土遺物については、各トレンチごとに述べていく。遺物の量はコンテナ箱 (34×54×20cm) に2箱程であり、2トレンチから最も多く出土している。

1トレンチ (1~8)

1・4・8はSD-01から出土したものである。1は土師器小皿で、外面には指押さえが見られる。4は磁器碗で、内外面には文様が見られる。8は軒平瓦であるが、瓦当面の文様は不明である。なお、SD-01ではこれら以外に陶器碗の破片が出土している。

2は土師器土鍋で、調整は内外面ナデであり、外面には煤が付着している。3は土師器炮烙で、調整は内外面ナデである。5~7は陶器で、5の碗は内外面に灰釉が施される。6は擂鉢で、口縁端部を大きく屈曲させる。内外面には鉄釉が施される。7は匣と考えられるが、内外面に灰釉が施されている。底部外面は未調整である。

2トレンチ (9~27)

9・10は土師器小皿で、調整は内面ナデ、外面指押さえである。11~14は土師器土鍋で、11・12については半球形を呈するいわゆる内耳鍋である。調整は、いずれも内外面ナデで、外面には煤が付着している。15は土師器の釜と考えられる底部破片で、調整は内外面ナデである。外面には煤が付着している。

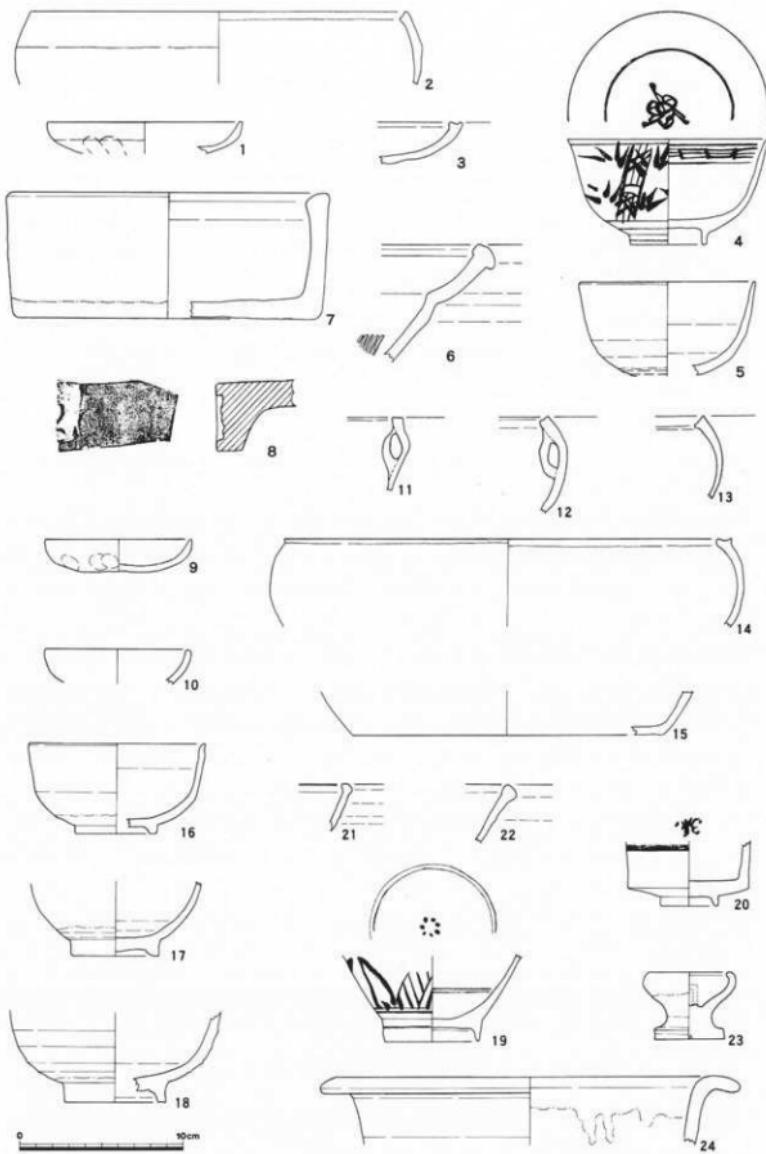
16~20は陶器碗で、19は広東碗である。16・17は内外面に鉄釉が施され、18は灰釉が施される。21は灰釉系陶器の鉢と考えられ、口縁部内外面には丁寧なロクロナデが施されている。22は陶器擂鉢で、内外面には鉄釉が施される。23は陶器ひょうそくで、内面から口縁部外面にかけては鉄釉が施される。底部外面は糸切り痕が明瞭に残り、中央には小さな穴が開けられている。24は陶器甕と考えられ、口縁端部を大きく外反させる。口縁部内外面には鉄釉が施される。

25~27は土師器火鉢で、全体的に焼成は良好である。調整は、25がナデで一部指押さえが行われ、26は外面ナデ、内面板ナデである。27は内面底部近くが板ナデ、これ以外はナデで、底部外面は未調整である。

3トレンチ (28~36)

28は弥生土器甕で、いわゆる台付甕の台部破片であるが、摩滅が著しく調整等は不明である。29は土師器炮烙で、調整は口縁部がヨコナデで、底部外面はヘラケズリである。30・31は灰釉系陶器碗で、高台は低く不整形で接地面にはモミ痕が見られる。調整は内外面ロクロナデで、底部外面には糸切り痕が残る。

32は陶器の蓋と考えられ、口縁部内外面には指頭による調整痕が見られる。33は陶器碗で、内外面には灰釉が施される。34は陶器広東碗で、内外面に文様が見られる。35は陶器の鉢と考えられ、底部

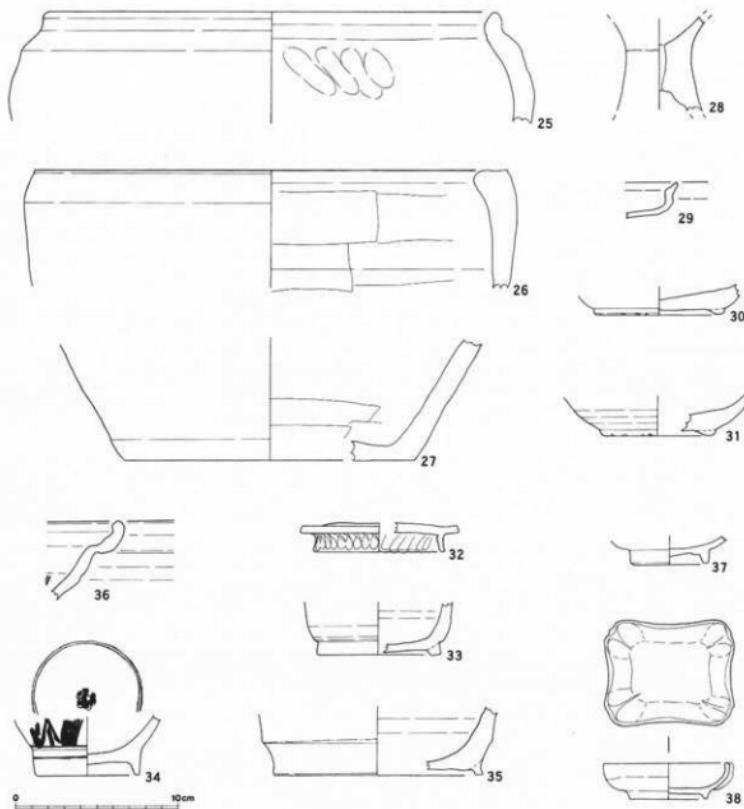


第12図 西新屋遺跡出土遺物実測図 - 1 (1/3)

には小さな高台が付く。体部外面下半には回転ヘラケズリが施される。36は陶器擂鉢で、口縁部を大きく屈曲させる。口縁部はロクロナデによる調整で、内外面には鉄軸が施される。

4 トレンチ (37・38)

37は陶器碗で、内面には鉄軸が施される。38は隅丸の長方形を呈した陶器皿で、内外面に灰軸が施される。



第13図 西新屋遺跡出土遺物実測図-2 (1/3)

第3表 西新屋遺跡出土遺物観察表

遺物No.	地区・層位	器種・分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
12-1	11F SD-01 H	小皿	12.0 (1.9)				密	良好	淡茶褐色	外面指押さえ	
2	11F 表土	H 土鍋	23.0 (4.5)				密	良好	茶褐色	内面ナデ	煤付着
3	11F 表土	H 炮烙	(2.5)				密	良好	茶褐色	内面板ナデ	煤付着
4	11F SD-01 Z	碗	12.4 6.4				密	良好	白色		
5	11F 表土	T 碗	10.4 (5.7)				密	良好	淡灰色		灰釉
6	11F 表土	T 楠跡	(7.1)				密	良好	淡褐色		铁釉
7	11F 表土	T 匣(?)	19.8 7.7				密	良好	茶褐色	底部未調整	内外面に灰釉
8	11F SD-01	軒平瓦					密	良好	暗灰色		
9	21F 表土	H 小皿	9.2 2.0				密	良好	暗茶褐色	外面指押さえ	
10	21F 表土	H 小皿	9.0 (2.1)				密	良好	淡褐色		
11	21F 表土	H 土鍋	(4.5)				密	良好	茶褐色		煤付着
12	21F 表土	H 土鍋	(5.9)				やや粗	良好	暗茶褐色		煤付着
13	21F 表土	H 土鍋	(5.1)				やや粗	良好	茶褐色		煤付着
14	21F 表土	H 土鍋	27.4 (5.4)				密	良好	淡赤褐色	内面ナデ	煤付着
15	21F 表土	H 笠(?)	(2.7) 19.0				密	良好	灰白色		瓦質
16	21F 表土	T 碗	10.8 5.5				密	良好	淡灰色		铁釉
17	21F 表土	T 碗	(4.6) 5.4				密	良好	淡褐色	底部外面回転ヘラケズリ	铁釉
18	21F 表土	T 碗	(5.6) 6.2				密	良好	淡灰色	底部外面回転ヘラケズリ	灰釉
19	21F 表土	T 広東碗	(5.3) 7.6				密	良好	淡灰色		灰釉
20	21F 表土	T 碗	(4.0) 3.6				密	良好	乳白色		灰釉
21	21F 表土	K 鉢(?)	(2.9)				密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ	
22	21F 表土	T 楠跡	(3.6)				密	良好	淡灰色		铁釉
23	21F 表土	T t.???	5.0 4.1 4.2				密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	铁釉
24	21F 表土	T 壺	23.0 (4.2)				密	良好	乳白色		铁釉
13-25	21F 表土	H 火鉢	27.8 (6.8)				やや粗	良好	淡茶褐色	内外面ロクロナデ	
26	21F 表土	H 火鉢	29.0 (7.2)				密	良好	淡赤褐色	内外面ロクロナデ	
27	21F 表土	H 火鉢	(7.6) 18.0				やや粗	やや不良	淡茶褐色	体部内面ナデ	
28	31F 表土	Y 壺	(5.7)				密	良好	淡褐色		摩滅著しい
29	31F 表土	H 炮烙	(2.2)				密	良好	茶褐色		煤付着
30	31F 表土	K 碗	(1.8) 7.6				密	良好	灰白色	高台部にモミ痕	
31	31F 表土	K 碗	(2.5) 6.8				密	良好	灰白色	高台部にモミ痕	
32	31F 表土	T 蓋	9.8 1.6				密	良好	暗赤褐色		铁釉
33	31F 表土	T 碗	(3.3) 7.8				密	良好	淡褐色		灰釉
34	31F 表土	T 広東碗	(3.7) 6.4				密	良好	淡灰白色		铁釉
35	31F 表土	T 鉢(?)	(4.3) 13.0				密	良好	淡褐色	底部外面回転ヘラケズリ	铁釉
36	31F 表土	T 楠跡	(4.8)				密	良好	淡褐色		铁釉
37	41F 表土	T 碗	(1.7) 4.8				密	良好	淡灰色		铁釉
38	41F 表土	T 盆	2.2				密	良好	淡灰色		灰釉

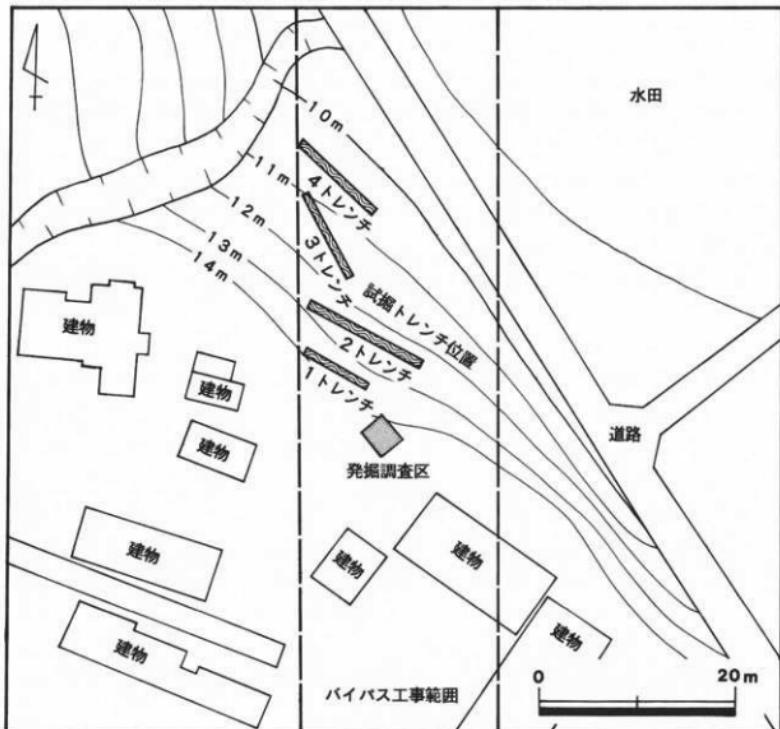
測定量の単位はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

Y - 弥生土器 H - 土器 G - 灰釉陶器 K - 灰釉系陶器 T - 陶器 Z - 磁器 D - 土製品

第5章 西新屋古墓群

1. 遺構 (第14図)

藏骨器は道路工事中、重機による地面掘削作業過程に散在して出土したということで、すでに作業員によって藏骨器は集められていた。調査は、藏骨器が出土した地点を中心 $2.8m \times 3.3m$ の範囲で掘り下げた。調査の結果、藏骨器は全て集められていたため、出土した状態をとどめてないことが判明した。藏骨器を取り上げ更に精査すると、 $10\sim15cm$ 大の礫が比較的集まって出土した。これらの礫は古墓に関係するものと思われたため慎重に掘り下げたところ、礫の下からビニール等が出土し、既に重機によって攪乱されていた。このため、礫を取り除き、地山面まで掘り下げ精査した結果、調査区内からは掘り込み等の遺構は検出されなかった。以上の結果から考えると、古墓は地山まで掘り込み、藏骨器は堆積土中に礫等を使用して埋納し、その上に墓石である五輪塔を安置する構造が想定され、工事中の掘削によりこれら遺構は破壊されているものと思われる。



第14図 西新屋古墓群発掘調査区位置図 (1/500)

2. 遺物 (第15~17図、第4表)

遺物は工事中に出土した蔵骨器と調査で出土した陶器・土師器等がある。調査中に出土した遺物は表土及び擾乱から出土しており、遺構に伴うものではない。このため、ここでは各器種ごとにまとめて説明する。

古瀬戸・瓶子 (第15・16図1~6)

1は口縁部を欠損しているが、頸部より肩部に大きく湾曲しながら広がり、肩部から底部にかけては直線的に収まるが、底部付近で再び外反し張り出す器形である。肩部上段は平行沈線が4条程巡らされている。調整は内外面ロクロナデである。底部は未調整であり、中央部が穿孔されている。外面には灰釉が施されている。

2は頸部以上を欠損している。器形は1と同じで、肩部下方に3条の平行沈線が巡らされている。調整は内外面ロクロナデである。底部は未調整であるが、穿孔はされていない。外面には灰釉がみられる。

3は口縁部はやや外反し、端部付近に突帯を有す。頸部より肩部に大きく湾曲しながら広がり、肩部から底部にかけては直線的に収まる。肩部上段と下段に3~4条の平行沈線が巡らされている。調整は内外面ロクロナデで、頸部内面には指押さえがされている。底部は未調整であり、中央部が穿孔されている。外面には全体に灰釉が施されているが、特に肩部付近に多く施され、垂れている。

4は器形は3と類似するが、肩部以下がやや膨らむ点が異なっている。肩部上段と下段に3~4条の平行沈線が巡らされている。調整は内外面ロクロナデで、頸部内面には指押さえがされている。底部は未調整である。外面には灰釉が施されている。

5は頸部以上を欠損している。器形は4と同じで、肩部上段は波状に下段は平行に3~4条の沈線が巡らされている。調整は内外面ロクロナデである。底部は未調整であるが、穿孔はされていない。外面には灰釉がみられる。

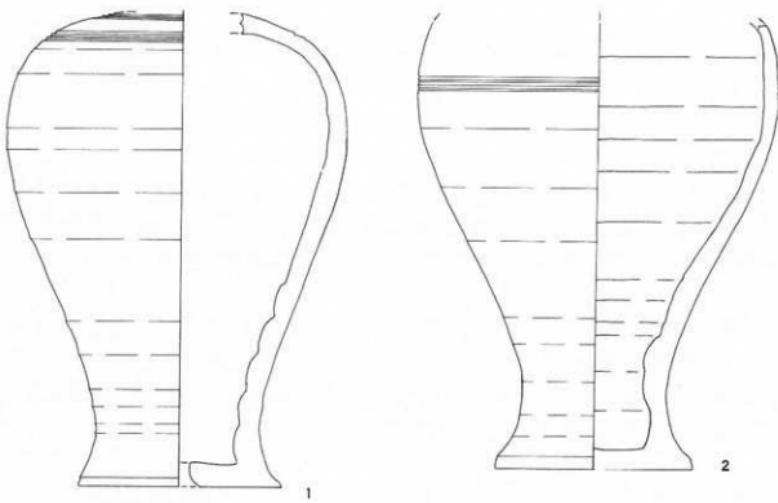
6は頸部以上を欠損している。器形は5と類似するが器高が5よりも低く、肩部は大きく湾曲しながら広がり、肩部から底部にかけてはやや膨らみながらおさまる。肩部と肩部上段は平行沈線が4条程巡らされている。調整は内外面ロクロナデで、底部は未調整である。外面には灰釉が施されている。

古瀬戸・四耳壺 (第16図7~10)

7は肩部の破片で、肩部は強く張り出している。肩部の把手は欠損し、痕跡が残っている。調整は内外面ロクロナデである。外面には灰釉が施されている。

8は体部の破片で、底部にかけて内湾している。調整は内外面ロクロナデで、一部指押さえがみられる。外面には灰釉がみられる。

9も体部の破片で、底部にかけて内湾している。調整は内外面ロクロナデで、内面の一部には板ナデが施される。外面には灰釉がみられる。



第15図 西新屋古墓群出土遺物実測図-1 (1/3)

10は底部の破片である。高台はほぼ直立し、接地面は平らである。底部外面の調整は高台貼付時のナデによって不明である。9と同一個体と思われる。

古瀬戸・水注（第16図11）

11は口縁部と底部及び注口部を欠損する。器形は頸部が細く肩部にかけて大きく張り出し、底部に向かって内湾しながらおさまる。注口部は肩部の位置に貼付けられている。肩部上段に4条程の平行沈線が巡らされている。調整は内外面ロクロナデである。外面には灰釉が施されている。

渥美・小壺（第17図12）

12は口縁部を欠損している。器形は口縁部はやや外反し、頸部より肩部に大きく湾曲しながら広がり、肩部から底部にかけてほぼ直線的におさまる。調整は内外面ロクロナデで、底部は未調整である。外面には全体に灰釉が付着している。

渥美・壺or壺（第17図13）

13は壺または甕の底部である。底部は平底で、接地面付近を指で押さえている。調整は内外面ロクロナデで、底部は未調整である。

灰釉系陶器・碗（第17図14）

14は口縁部を欠損している。有高台で、高台はやや外反し、接地面は平坦である。調整は内外面ロクロナデで、底部には糸切り痕がみられる。

瀬戸美濃・碗（第17図15）

15は口縁部直立し端部は丸く、体部下半が丸みをもつ。高台は垂直で、接地面は平坦である。灰釉が施され、底部はヘラ切り後ナデ調整がされている。

瀬戸美濃・灯明皿（第17図16）

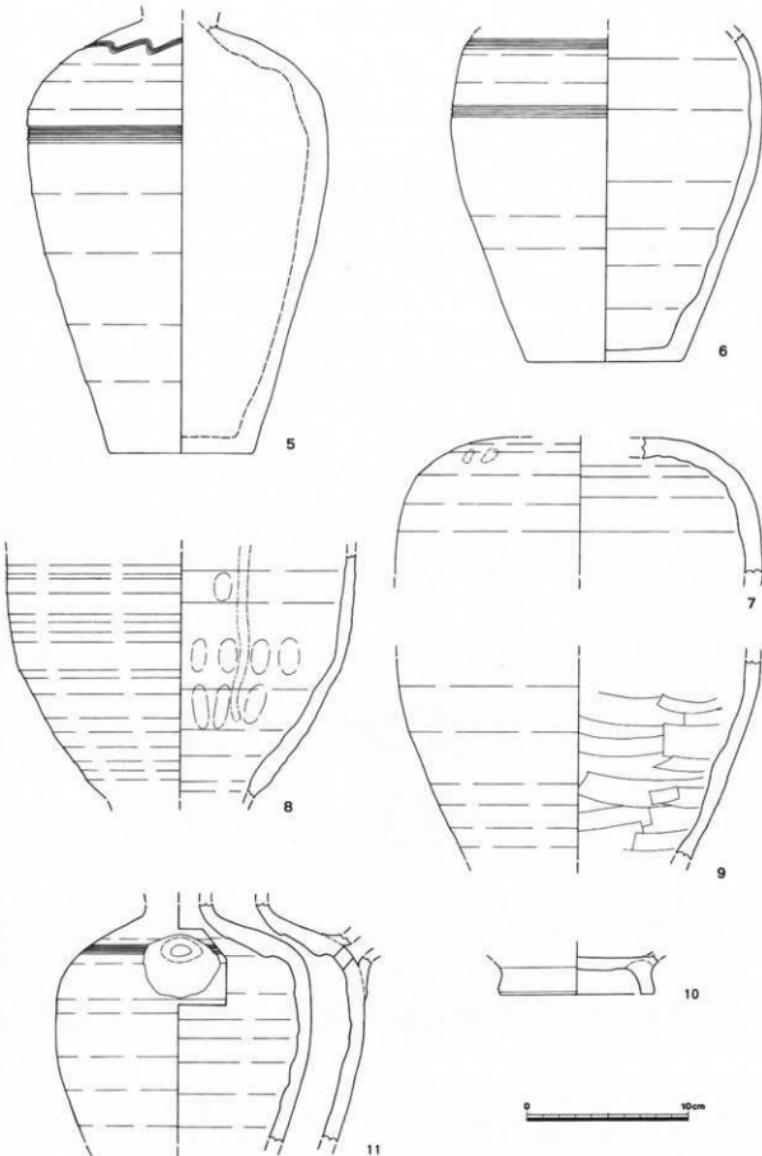
16は口縁部は外方に開き端部は丸く、体部は僅かに丸みをもつ。外面の底部付近はヘラケズリがなされ、底部は回転ヘラ切りされている。内外面に灰釉が施されている。

瀬戸美濃・ひょうそく（第17図17）

17は杯部は全体に丸みをもち、口縁は内湾する。台部は下方に開き、底面に糸切り痕を残す。杯部内面中央には芯立てが付けられている。芯立ては円筒形で中心に円孔があり、下部が一部切り込まれている。調整は外面ナデ、底部は糸切りである。台部周辺以外は鉄釉が施されている。

瀬戸美濃・摺鉢（第17図18）

18は底部周辺の破片資料である。底部は平底で、外傾して立ち上がる。内外面には鉄釉が施され、



第16図 西新屋古墓群出土遺物実測図－2 (1/3)

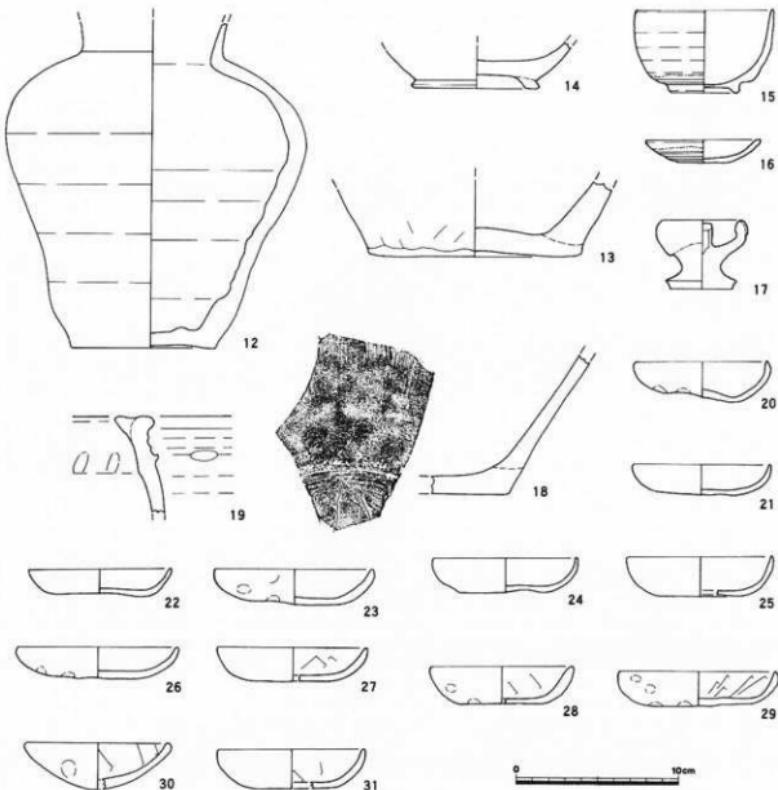
内面には櫛描による摺目が施されている。底は未調整である。

常滑・甕（第17図19）

19は口縁部の破片資料である。口縁部は内傾し、端部を肥厚している。調整は内外面ロクロナデである。

土器器・小皿（第17図20～31）

20～31は非ロクロ整形で、20～26は外面指押さえ、内面ナデ調整、27～31は外面指押さえ、内面板ナデである。



第17図 西新屋古墓群出土遺物実測図－3 (1/3)

第4表 西新屋古墓群出土遺物観察表

遺物NO.	地区・層位	器種・分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
15-1	表土・擾乱	T 瓶子	(27.0)	12.4	最大20.8	密	良好	明黄灰色	内外面ロクロナデ底部に穿孔	古瀬戸	
2	表土・擾乱	T 瓶子	(27.0)	12.0	最大22.0	密	良好	淡灰白色	頸部内面指押さえ	古瀬戸	
3	表土・擾乱	T 瓶子	4.0	(30.5)	9.0	最大19.2	緻密	良好	淡灰白色	頸部内面指押さえ	古瀬戸
4	表土・擾乱	T 瓶子	4.5	26.6	8.0	最大16.5	密	良好	淡灰白色	頸部内面指押さえ	古瀬戸
16-5	表土・擾乱	T 瓶子	(26.5)	9.0	最大18.5	緻密	良好	明黄灰色	内外面ロクロナデ	古瀬戸	
6	表土・擾乱	T 瓶子	(20.1)	9.4	最大19.2	密	良好	淡灰白色	内外面ロクロナデ	古瀬戸	
7	表土・擾乱	T 四耳壺	(8.4)		密	良好	灰白色	内外面ロクロナデ	古瀬戸		
8	表土・擾乱	T 四耳壺	(15.1)		最大21.6	緻密	良好	灰白色	内外面ロクロナデ・内面指押さえ	古瀬戸	
9	表土・擾乱	T 四耳壺	(12.1)		密	良好	灰白色	内外面ロクロナデ・内面板ナデ	古瀬戸		
10	表土・擾乱	T 四耳壺	(2.3)	9.4	密	良好	灰白色	内外面ロクロナデ	古瀬戸		
11	表土・擾乱	T 水注	(14.7)		最大15.8	密	良好	淡灰色	内外面ロクロナデ	古瀬戸	
17-12	表土・擾乱	T 小壺	(19.9)	8.8	最大18.4	密	良好	暗灰色	内外面ロクロナデ	渥美	
13	表土・擾乱	T 壺或壺	(4.6)	12.0	密	良好	淡灰褐色	内外面ロクロナデ	渥美		
14	表土・擾乱	K 碗	(2.6)	7.4	密	良好	明灰色	底部外面部糸切り後ナデ	瀬戸美濃		
15	表土・擾乱	T 碗	8.4	5.0	密	良好	淡茶灰色	底部ヘラ切り後ナデ	瀬戸美濃		
16	表土・擾乱	T 灯明皿	7.0	1.4	緻密	良好	淡灰色	底部回転ヘラケズリ	瀬戸美濃		
17	表土・擾乱	T ヒュウガク	4.8	4.2	3.8	緻密	良好	淡黄灰色	底部外面部糸切り	瀬戸美濃	
18	表土・擾乱	T 描鉢	(8.5)		密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ	瀬戸美濃		
19	表土・擾乱	T 壺	(5.8)		密	良好	淡褐色	内外面ロクロナデ	常滑		
20	表土・擾乱	H 小皿	8.0	2.4	密	やや不良	暗黄褐色	外面指押さえ・内面ナデ			
21	表土・擾乱	H 小皿	8.3	1.9	密	やや不良	暗灰褐色	外面指押さえ・内面ナデ			
22	表土・擾乱	H 小皿	8.7	1.7	密	やや不良	暗灰褐色	外面指押さえ・内面ナデ			
23	表土・擾乱	H 小皿	9.5	2.2	密	やや不良	暗黄灰色	外面指押さえ・内面ナデ			
24	表土・擾乱	H 小皿	9.0	2.1	密	やや不良	暗灰褐色	外面指押さえ・内面ナデ			
25	表土・擾乱	H 小皿	8.9	2.4	密	良好	淡灰白色	外面指押さえ・内面ナデ			
26	表土・擾乱	H 小皿	9.8	1.9	密	やや不良	暗黄灰色	外面指押さえ・内面ナデ			
27	表土・擾乱	H 小皿	9.2	2.1	密	やや不良	暗黄灰色	内面板ナデ後ナデ			
28	表土・擾乱	H 小皿	8.6	2.3	密	良好	淡橙色	内面板ナデ後ナデ			
29	表土・擾乱	H 小皿	9.6	2.1	やや粗	やや不良	淡乳白色	内面板ナデ後ナデ			
30	表土・擾乱	H 小皿	8.8	2.8	密	良好	淡褐色	内面板ナデ後ナデ			
31	表土・擾乱	H 小皿	9.2	2.4	密	やや不良	淡灰白色	内面板ナデ後ナデ			

系法量の単位はcm、()は残存数値。底径には脚部径・高台径を含む。

Y - 弥生土器 H - 土師器 G - 灰釉陶器 K - 灰釉系陶器 T - 陶器 Z - 磁器 D - 土製品

第6章 まとめ

1. 鎌田遺跡について

鎌田遺跡は、段丘縁辺部に形成された遺跡であるが、古くから開発の手が及び近年でも部分的な破壊が行われ、遺存状態は非常に悪いと言える。

今回の調査では、比較的良好に遺構が残っていると考えられる部分に調査区を設定したが、遺跡の端に当たるのかあるいは既に破壊されているのか、ほとんど遺構は検出されなかった。このため、遺跡の性格はほとんど不明である。以前の調査（註1）では、「V字溝、ピット、小貝塚などの遺構が認められ」ている。また、この貝塚の形成時期は平安時代から室町時代と推察されており、こうした時期の集落が形成されていた可能性が考えられる。

今回の調査で出土した遺物では、灰釉系陶器の碗・小皿・甕が多くを占めていた。このうち碗や小皿については、高台が低くつぶれているものが多く、これらは藤澤編年（註2）の第4型式から第7型式におよそ併行するものである。年代的には12世紀中葉から13世紀中葉のものと考えられ、前回の調査で出土した遺物と大きく変わるものではない。また、無高台のものについてはやや新しく位置付られる。なお出土した灰釉系陶器は、基本的には渥美系産と考えられる「南部系山茶碗」で占められているが、一部にいわゆる「北部系山茶碗」が出土しており、橋良遺跡（註3）と同じような複雑な流通形態の存在が予想される。

西新屋古墓群から出土した古瀬戸瓶子等の年代観ともおおよそ一致するもので、この周辺には中世を中心に大きな集落が形成されていたことも予想される。

註1 森田勝三 「豊橋市野依町・鎌田遺跡の破壊について」『足跡』第3号 1978

註2 藤澤良祐 「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』I 1982

註3 豊橋市教員委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡』 1994

2. 西新屋遺跡について

西新屋遺跡の調査は、基本的に遺跡の有無及び範囲確認を目的としたものであった。遺構は溝状のSD-01が検出されたのみで、明確な遺構は存在しなかった。遺物については、表土中から出土したもののがほとんどであった。このため、調査対象地については、遺跡は存在しないものと考えた。

出土した遺物については、段丘上からの投棄あるいは流れ込んだものと推測でき、遺跡の主体は今回調査地の南側に存在するものと考えられる。遺物は、大半が近世のもので、主に18世紀代を中心としている。前述の鎌田遺跡や西新屋古墓群出土遺物の年代と大きく違っており、この付近に時期の異なる遺跡が存在する可能性が考えられる。また、弥生土器も出土しており、弥生時代の遺跡の存在も予想される。

3. 西新屋古墓群について

今回の緊急調査では遺構は確認できなかったが、遺物は良好なものが出土している。ここでは、出土遺物を検討し、併せて西新屋古墓群について簡単にまとめる。出土遺物には、古瀬戸・瓶子・四耳壺・水注・渥美・小壺等、灰釉系陶器碗、瀬戸美濃・碗・灯明皿・ひょうそく・摺鉢・常滑・甕、土師器・小皿がある。

古瀬戸では、瓶子の時期は1・2は13世紀前葉、3は13世紀中葉、4は13世紀後葉、5は13世紀末葉、6は14世紀中葉～後葉である。四耳壺の時期は、7は14世紀代、8～10は13世紀代である。水注（11）の時期は14世紀代である。渥美では、小壺（12）の時期は13世紀前半期、壺もしくは甕の底部（13）は13世紀代である。灰釉系陶器碗は在地のもので、時期は13世紀前半期である。瀬戸美濃では、碗（15）は18世紀以降、灯明皿（16）は18世紀以降、ひょうそく（17）は18世紀末以降、摺鉢（18）は19世紀以降の時期である。常滑では、甕（19）の時期は17世紀以降である。土師器・小皿は形態的な変化が少なく、時期比定が困難である。他遺物の時期が13～14世紀と18世紀であることから、この時期におさまるものと思われる。

これらの土器のうち、藏骨器に転用されたと考えられるものは古瀬戸・瓶子・四耳壺・水注・渥美・小壺等であり、瓶子（1・3・4・5）には実際に火葬骨が入っていた。個体数を数えると、古瀬戸・瓶子6個体、古瀬戸・四耳壺3個体、古瀬戸・水注1個体、渥美・小壺1個体、渥美・壺もしくは甕1個体であり、総数は12個体である。

一方五輪塔は全部で11個体残されており、ほぼ藏骨器の個体数と合致する。五輪塔は一石五輪塔が3個体含まれており、他は全て組合わさるタイプのものであった。藏骨器と五輪塔を対応させるのは困難であるが、一般に一石五輪塔は時期が新しく16世紀以降出現するものと言われている。しかし、藏骨器のなかには16世紀以降のものはみられず、最も新しいものでも14世紀代の古瀬戸・瓶子・四耳壺・水注3個体のみであった。一石五輪塔と14世紀代の藏骨器の数は一致するが、五輪塔自体の原位置が不明であるため、藏骨器と対応させるのは困難である。

以上の点から西新屋古墓の性格を考える。現在の西新屋には寺院は存在せず、過去存在していたという記録も残っていない。また、寺に付属する古墓ならもっと多くの藏骨器が出土するはずであるが、12個体の藏骨器しか出土せず、しかも一箇所に集中していた。墓自体も、藏骨器の時期から推定すると2・3個体くらいが四半世紀づつ埋葬されているようである。このことから想定すると、この地を納めていた土豪か家臣等の中小武士団の家族墓もしくは一族墓である可能性が考えられる。古墓の隣接地には畔田氏の居城である上地城址がある。古墓のある梅田川流域は畔田氏という地侍がいたといわれ、東觀音寺（豊橋市小松原町）に残る『東觀音寺文書』によれば寛正2年（1461）以前にこの地一帯に存在していたと推定されている。畔田氏については不明な点が多く、いつ頃からこの地に居を構えていたかは判らないが、15世紀には勢力があったことからそれ以前の13世紀にはすでに土豪として君臨していた可能性はある。西新屋古墓群は畔田氏と関係のある古墓であるかも知れない。

報告書抄録

フリガナ	カマタイセキ・ニシアラヤイセキ・ニシアラヤコボグン							
書名	鎌田遺跡・西新屋遺跡・西新屋古墓群							
副書名								
卷次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第30集							
編著者名	小林久彦・岩瀬彰利							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440 愛知県豊橋市向山大池町20-1 (豊橋市民文化会館内) TEL0532-61-5111							
発行年	西暦1996年6月28日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カマタ 鎌田	トヨハシシヨリチヲ 豊橋市野依町 アザカマタ 字鎌田	23201	79628	34° 42' 10"	137° 23' 12"	19870804~ 19870825	205 m ²	道路造成
ニシアラヤ 西新屋	アザニシアラヤ 字西新屋		79682	41' 58"	23' 31"	19870804~ 19870825 19881012	40 m ² 9 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
カマタ 鎌田	集落跡	古代・中世 ・近世	溝・土壤等	灰釉陶器・灰釉系陶器 土師器等				
ニシアラヤ 西新屋	散布地 古墓	中世・近世	溝・土壤等 なし	灰釉系陶器・土師器等 古瀬戸・瓶子等		遺構は工事で既に破壊されていた。		

写 真 図 版

写真図版 1



1. 緑田遺跡遠景
(南東から)



2. 緑田遺跡近景
(南から)



3. 緑田遺跡 A 区全景
(南から)

写真図版2



1. 錦田遺跡B区・C区
全景 (北から)



2. 錦田遺跡B区全景
(北から)

写真図版3



1. 鎌田遺跡B区近景
(南から)

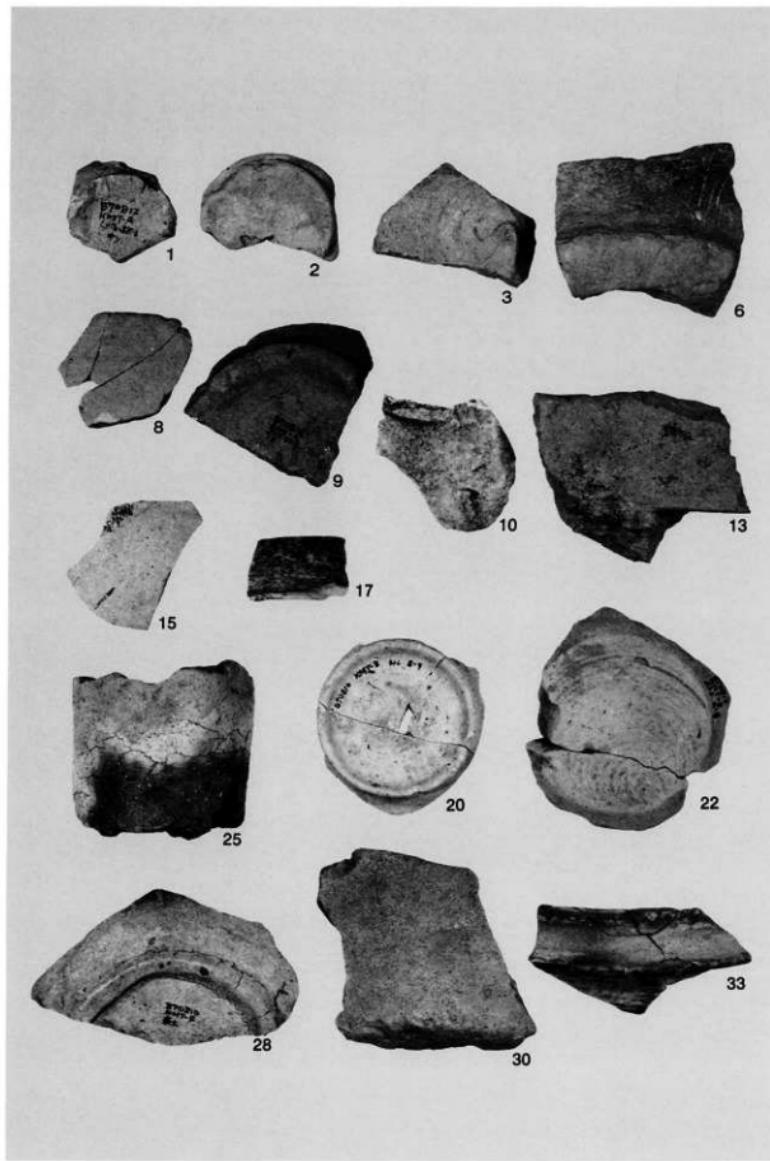


2. 鎌田遺跡B区
SK-03 (南から)



3. 鎌田遺跡C区全景
(北から)

写真図版 4



鎌田遺跡出土遺物

写真図版5



1. 西新屋遺跡遠景
(北東から)



2. 西新屋遺跡近景
(北から)



3. 西新屋遺跡作業風景
(南から)

写真図版6



1. 西新屋遺跡1トレンチ（南東から）



2. 西新屋遺跡2トレンチ（南東から）

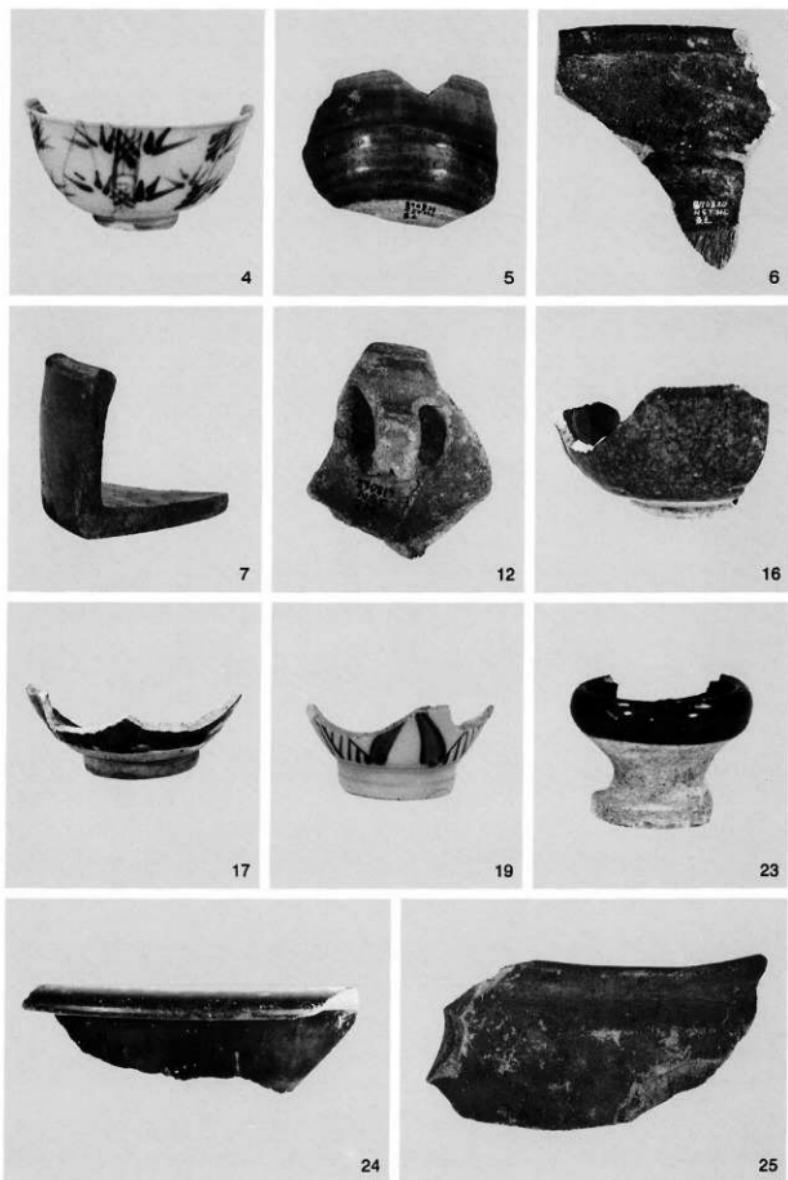


3. 西新屋遺跡3トレンチ（南東から）



4. 西新屋遺跡4トレンチ（南東から）

写真图版 7



西新屋遺跡出土遺物

写真図版 8



1. 西新屋古墓群近景（北から）



2. 蔵骨器出土土地完掘後全景（西から）

写真図版9

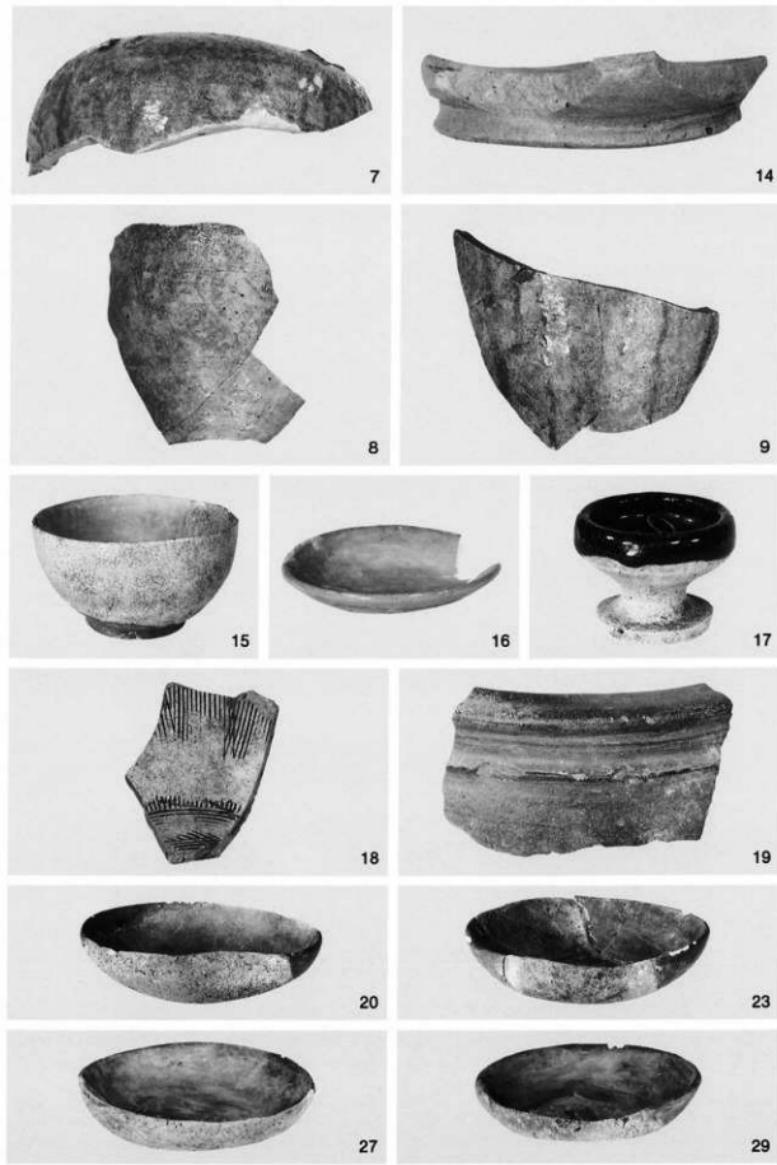


1. 移された五輪塔（南から）



2. 五輪塔近接写真（南から）

写真图版10



西新屋古墓群出土遗物

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第30集
-鎌田遺跡・西新屋遺跡・西新屋古墓群-
野依バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成8年6月28日

発行 豊橋市教育委員会◎
文化振興課

〒440 豊橋市向山大池町20-1
印刷 株式会社奉仕堂印刷